

Newsletter

November 2019

<http://www.aack.info>

目次

傘寿に6千mを目指して

安田隆彦1

寺本巖さん追悼 (2019年6月23日逝去)

寺本巖君を悼む 平井一正6

追悼 寺本巖さん—京大探検部チリ・パタゴニア学術調査1968～69を回顧して

安成哲三7

第49回雲南懇話会 (2019年8月19日開催)

講演概要

山岸久雄、前田栄三12

図書紹介

「日本映画大学で実践しているドキュメンタリー映像制作の作法」

横山宏太郎15

会員動向16

編集後記16

傘寿に6千mを目指して

安田隆彦

《一病息災》

テニスを始めたのは40歳のカイロ赴任中。サーブをすると肩の骨がコキンコキンと音がしました。ボール投げはサイドスローだったので真上から腕を動かすとどこかが当たるのでしょうか。すぐ慣れるだろうと、毎朝宿舍の屋上でピラミッドに向かってラケットを振る練習をしました。帰国後も続けましたが、音が消えるのに10年ほどかかりました。テニスは身体の故障の多いスポーツです。どこかが痛くなるたびに、先達から教わる対処方法を加えた早朝運動をしました。教わる度に2～3か月は続け、体に合わなければ止め、合うもののみ継続しました。退職後は毎日がテニスになり、故障を修復するための運動がエスカレートしました。起きぬけに光明石温泉に入ることから始まり、終わるまで1時間半以上掛けています。テニスの先達、テレビ、雑誌等から教わった三十数アイテムのストレッチを主体とした運動です。その効果が体力がしっかり維持され、激しい運動を必要とするシングルの試合に挑戦し続けています。

コートのできる日は毎日3時間の練習、使えない日は多摩川べりを1時間ジョギング。雨の日は6kgの水を担いで1時間以上近くの霊園内をウォーキング。肩の異常のおかげで早朝運動を始めたのが健康維持に繋がり、これが一病息災なのだと有り難く感じています。テニスの腕も次第に上がり日本シニア75歳枠(75～79歳)では全国ランキング14位までになりました。80歳枠では38位まで落ちましたが、85歳枠になったら全国ランキング4位以内に入るのが目標です。

《下手の横好き》

NHKの特別番組で山中伸弥教授とタモリにより、人間の身体について最新の研究成果が紹介されました。脳を介さず臓器同士が対話しながら諸活動にあたっているとのこと。対話のために体内を飛び交っているメッセージ物質が何百種類もあり、それら新物質の発見競争が研究者間で激しく行われている。また別の話でDNAの中には無数のスイッチがあり、スイッ

チの ON/OFF 次第で人間の形、行動パターン、得意分野等が千差万別になるとか。それらの話を聞いていると、以前より不思議に思っていた体と心が一致しない性同一性障害も容易に起こりうるということが納得できました。同じことで趣味の世界でも、何かをやりたい気持ちとそれを成し遂げる身体能力が一致しない趣味同一性障害というのがあるのではないかと思います。自分の持つ妙な特徴に気付かされたのはある偶然の事。ナショナルジオグラフィック社の観測船に乗って南極に行ったとき、絶叫する南緯 60 度と呼ばれる大荒れの海域を 24 時間かけて通過します。その間 3 回の食事があるのですが、最初の食事でも百十数人の客の半分が食堂に来て、2 回目ですらに半分。3 回目の食事に出て来たのは 10 人足らずで、食事中はどのようにして船酔い対策をしたかの自慢話になりました。磁石や薬利用の様子が語られましたが、何もせずに荒海を通過できたのは私ただ一人。意外な特徴にびっくりしました。山ではなく海の趣味に嵌まっていたら、思いもかけぬ良い成果が出たかもしれません。

大学入学と同時に山岳部に入り、登山を存分に楽しみました。就職後は仕事と家族に対する責任のため危険な山は諦めていましたが、退職後山歩きを再開しました。日本の山を歩いている間は気が付きませんでした。海外登山を始めて、4000m を超えると高度障害が顕著に出始めました。多くの人は頭痛に悩まされるのですが私の場合は下痢になるのです。尾籠な話で恐縮ですが、何の予告もなくプシュッと出てしまうのです。最初のうちは下痢ぐらい薬を飲めばすぐ直ると思って色々な薬を試しましたが、量をはかり増やしても何ともなりません。普通の人には、6000m の山ですと 4～5 日ぐらゐの高度順応期間を終えて挑戦すれば何ともないようです。私も最初はそのペースでスタートしましたが駄目でした。ゆっくり時間をかけて少しずつ慣らして行けば何とかかなと言う先達の言葉に従いだんだんその期間を延ばし、今回は普通の人のおよそ 4 倍ほどの期間を取って慣らしてみました。それでも体調不良は付きまといました。そんなに体に合わないのならやめれば良さそうなものを、どうしても山に行きたい意欲を抑えることができません。趣味同一性障害と認識しています。

《傘寿の 6 千 m》

スイスのアルピニストが故郷のスイスより数段美しい山だと絶賛していたペルーアンデス。ヒマラヤと比べアプローチが遥かに楽な登山基地ワラス町より、傘寿で 6 千 m 峰に挑戦しました。ワラス町を挟んで北側の白い山脈は全長 180km にわたり、峩々とした 6 千 m 峰が 25 座、南側に並行して走る滑らかな山脈は雪のない 4 千 m 前後。75 歳の時にもここより出発してトクヤラフ峰 6035m に臨みましたが、頂上直下 70m の所で撤退しました。その時の経験で問題は足が攀ることと高度順応でした。

足を鍛えるため富士山を春秋に 2 回、浅間山を夏に 2 回、丹沢と他の山に 8 回、合わせて年 12 回は歩きました。雪の丹沢で今までなかった太もも裏の筋肉、大腿二頭筋が激しく攣り、雪の中にしゃがみ込み動けなくなった時はもうこれで山もお終いかと感じました。雪道を下るとき、重い高所用の二重靴を持ち上げてから前に出すのですが、その持ち上げる力を出す二頭筋が加齢で衰えたのでしょうか。足首に 2 kg の重りを付け、後ろに持ち上げる運動を早朝のトレーニングに加えて鍛えましたが芳しくありません。出発する今年の 1 月から 2 月、丹沢の三の塔尾根（高低差 930m）で軽い靴から始めて少しずつ靴の重みを加え、漸く 9 回目の登山で高所二重靴でも攀らなくなりました。念押しで 10 回目を無事登って、ペルー行きを決断しました。高度順応としては登山基地の町ペルーのワラスが 3100m ですので、5 月に富士山の 3200m 以上に 4 回登り、5 回目は頂上で一泊。出発直前に三浦雄一郎の減酸素室で 4000、5000、6000m 相当の酸素量の中で 2 時間ずつ階段上り訓練を実施しました。

ペルーに入ってから先ず時差調整のため首都リマに 3 泊した後、登山基地の町ワラスに入りました。これでワラスに対しての高度順応が万全と思っていました。しかし到着 2 日目、街を歩いていたらプシュッと出た時の落胆はかなりのものでした。高度順応で長く滞在するので町一番のホテルを利用、部屋に付いた広いテラスからは 5～6 千 m 峰が 10 座程一望できました。今回使用したガイド会社は Peruvian Guide。経営者の Rodolfo Reyes は馬方からスタートしてポーターやコックを経験した後、ガイド資格を取得し、10 年経験を積んだ後会社

を興した努力家。会社の看板は表に出さず、ネットだけで客を集めている。こんな会社で大丈夫か、騙されたかなと思いましたが手配に間違いは有りませんでした。

2019年6月30日

ワラスで2日間休んだのち高度順応を始めました。最初はウイルクコチャ湖 3600m の日帰り。車で登る途中2回に分けて3時間歩きました。翌日はウイルクコチャ湖まで車で登り、そこからウイルクコチャ峰 3800m を3時間かけて登った後、湖畔で一泊。

夕食はスープにメインディッシュとデザート、味は合格。翌日昼まで滞在し下山。翌々日は一日休養。

7月4日

2回目の順応登山はチュルップ湖 4350m の日帰り。車で40分、登山口(3700m)まで行き高度差650mを4時間かけて登行。5年前は普通の細い登山道で怖い岩場が2か所ありました。しかし町は登山客増を目論み、道を幅広にして随所に階段を整備、岩場には太いロープを張って安全な登山道に変身。湖畔で2時間滞在したのち3時間で下山。翌日は一日休養。

7月6日

チュルップ湖畔のキャンプ地まで出かけて一泊。翌朝はチュルップ湖より130m上にある小さい氷河湖チュルピタ湖まで4時間かけて散策。その後2時間かけて下山。翌日は休養。

7月9日

パストリル氷河 5000m に車で行く途中4時間の歩き。氷河で1時間滞在して帰る。5年前は氷河に触ったり写真を撮ったりできたので大勢の観光客が居ましたが、今はなんと氷河は100mほど後退し、氷河湖の水が陸地と氷河とを隔てて魅力がなくなったので閑散としていました。翌日同じ氷河に行く途中1時間歩いて5000mで4時間滞在してからワラスに帰り、その翌日は休養。

7月12日

パストリル氷河まで車、2時間半で到着。テント設営後あたりを散策して一泊。滞在中の早朝のSpO₂は85~90%になったので高度順応は順調に完了したと思えました。翌日の午前中も散策をしてからホテルに4時帰着。空腹を感じたので6時の夕食までの腹抑えにチョコレート



ウイルクコチャ湖畔の昼食 右端は Huantsan 6395m

トを食べました。すると30分ぐらいで突然初めての本格的な下痢。多分朝入れたテルモスのお湯に黴菌が混じり、それで紅茶を入れたのが原因でしょう。慌てて下痢止めを飲みましたがトイレに数回通いました。翌14日は休養日で下痢も止まったので消化の良いものを食べてゆっくり休みました。

7月15日

7時40分ホテル発。車で1時間10分ピコス村(3400m)まで行き、そこで今回のパーティーが揃う。私一人の登山をサポートするチームはガイド、高所ポーター、コック、ロバ使いにロバ3頭。南米ではガイドの資格を取るのに4年のはかかり、最初の養成学校に入学した人の1割ぐらいしか資格取得が出来ないと言う厳しい教育。その為登山技術、人に接する態度、語学等とてもレベルが高く、今まで南米で4回使いましたが一度も不満はありませんでした。登り始めはなだらかなユーカリ林の中を約1時間、気分良く歩く。その後傾斜15~20%の尾根道の登り。視界の良い快適な登りなので特に疲れは感じなかったのですが、下痢の後遺症か歩行がかなり遅くなりました。最後の1時間は懐中電灯をつけて4600mのBCに到着。1200mの登り約6時間を予定していたのが実際は10時間もかかりました。体力を消耗したので翌日は予定外の休養。それでも回復は十分と感じられませんでした。目標のコパ峰6188mのアタック日はBCより600m上のHCから登り下り1000m。高度のことを考えると現状の体力で行くのはやや無理があると判断。尾根続きになっ



ピコス峰 5315m にて

ている隣の 900m 低いピコス峰 5315m に目標を変更しました。BC の個人テントは日本の 4～5 人用の広さがあり荷物置き場も広く快適。食堂テントには椅子テーブル設置、トイレテントまで設営してくれました。

2019 年 7 月 17 日 (水) 快晴 気温 -1°C
早朝 SpO_2 82

午前零時起床。スープとパンの軽食後、午前 1 時出発。満月の明かりの中ライトを点けて歩き始める。ポーターは BC までの荷物運搬だが、今回雇ったハイポーターと言うのは個人装備まですべてを頂上まで持ってくれる。テント地すぐ上の 2 つの氷河湖を過ぎると岩山の登りとなる。ほとんど人の入らない山なので踏み跡はなく浮石だらけ。むき出しの岩の感覚を楽しみながら登りました。6 時薄明かりになったところで雪溪 (推定 5100m) に出てアイゼン装着。固く締った美しい雪紋の上を快適なキシミ



当初目標としたコバ峰 6185m

音を立てながらコンティニューアスで登る。傾斜は 20 度前後できつくない。5315m の頂上に 7 時 30 分着。細長い痩せた頂。隣を仰ぎ見ると、当初目標のコバ峰が眩しい。登頂の儀式は握手でも両手を上げることでなく男同士で抱き合うあまり気分の良くない形式。当初の目標を格下げしての登頂なので感激なし。下りは岩の部分を 4 時間掛けて慎重に歩き、12 時にテント帰着。一休み後氷河湖を散策し写真撮影。

18 日 (木) 快晴

1 日余裕が出来たので、当初目標だったコバ峰の HC までのルートを途中まで登ることに。当初の予定では岩稜沿いに急勾配の雪渓登攀でした。しかし近年落石が多くなり少し岩稜から離れた、10m ほどの氷壁登攀のあるルートをたどりました。

19 日 (金) 快晴

BC を 8 時出発。5 時間 30 分で車の待つピコス村に到着。登りの時は気が付かなかったが登山道の一部は小型車が通れるほど広い。1920 年 5 月 31 日に起きた震度 7.9 の地震で氷河湖が決壊し、土石流で下流のユンガイ村が全滅し 1 万 8 千人が瞬時に埋没した由。遺体の掘り起こしは禁止され、村全体を記念墓地として保存されている。その後氷河湖の安全対策土木工事が長い年月をかけてなされた結果造られた道が 100 年経ってほとんどの部分は自然の山に戻ったがまだ一部で残っているとのこと。下山の最後にスッテンコロリをすることが最近多いので、足元だけを凝視しながら下る。眼前の広大な谷と対岸の滑らかな山並みがとても美しい。その景色を見る時は必ず立ち止まって眺める。にもかかわらず今回も最後の最後でツルリンコをして肘を擦りむく。

私の弱点は腸で、今回の登山中正常な糞が出たのは 2～3 回のみ。大抵軟便でそれがいつ出てくるかわからないので常時心配しながらの歩き。恥ずかしながらおしめを付けての登山を強いられている。高度順応にもともと弱い体質で、傘寿になった今の体では高い山に挑戦することは無理のあることと遅まきながら実感。海外登山はこれにて終了と漸く吹っ切れました。今後は 90 歳で 5 月の残雪の富士山、100 歳で 1～2 月の雪の丹沢を登るのが目標です。その為頻繁に起こる体の不具合を朝のストレッチ体

操でしっかり修復しながら、末永く山を楽しみたいと思っています。

費用内訳

ガイド費用	300,000 円
交通費 (現地往復)	168,000 円
ホテル代 (含食費)	248,000 円
町中外食費	48,000 円
三浦ドルフィン	23,000 円
合計	約 80 万円

2019 年				COPA 峰 実働表					
6 月	23	日	延 日 数	東京-リマ	高度 (m)	2:25pm 成田発 メキシコ航空 AM57 10:55pm ペルーリマ着	早朝 SpO ₂	費用 USS	
	24	月		リマ 時差調整					
	25	火		リマ 時差調整					
	26	水		リマ 時差調整					
	27	木	1	リマ-ワラス バス	3100	Andino Club Hotel			
	28	金	2	休養	3100	ガイド社訪問	85		
	29	土	3	休養	3100		90		
	30	日	4	ウイルクコチャ湖	3600	途中登り 3 時間歩き	90	36	
7 月	1	月	5	ウイルクコチャ湖	3800	登り 3 時間。ウイルクコチャ湖 1 泊	84	135	
	2	火	6	ウイルクコチャ湖	3600	午後ワラス帰着	85		
	3	水	7	休養	3100		90		
	4	木	8	チュルップ湖	4350	車 40 分 登り 4 時間 下り 3 時間	85	90	
	5	金	9	休養	3100		90		
	6	土	10	チュルップ岩峰	4440	登り 5 時間。チュルップ湖 1 泊	85	145	
	7	日	11	チュルップ湖	4350	午後ワラス帰着	70		
	8	月	12	休養	3100		92		
	9	火	13	パストルリ氷河	5000	車 2 時間 30 分 途中 3 時間歩き 2 時間滞在	95	54	
	10	水	14	パストルリ氷河	5000	途中 1 時間歩き 4 時間滞在	86	54	
	11	木	15	休養			92		
	12	金	16	パストルリ氷河	5000	氷河滞在 1 泊	92	185	
	13	土	17	パストルリ氷河	5000	午後ワラス帰着	83		
	14	日	18	休養			89		
	15	月	19	Hotel-Vicos-BC	4400	登攀高度差 1200m 10 時間	95	2087	
	16	火	20	BC 休養	4400		87		
	17	水	21	BC- ビコス峰 -BC	5315	登攀高度差 900m 登り 6 時間 20 分下り 4 時間	82		
	18	木	22	コパ峰氷壁まで	4800	登り 400m 3 時間 30 分 下り 2 時間	85		
	19	金	23	BC-Vicos-Hotel	3100	下り 1200m 5 時間 20 分	82		
	20	土	24	休養			94		
	21	日	25	ワラス-リマ					
	22	月		リマ散策					
	23	火		リマ発		3:50pm- メキシコ航空			
	24	水							
	25	木		帰宅		成田着 6:20am Am58	合計	2732	

寺本巖さん追悼（2019年6月23日逝去）

寺本巖君を悼む

平井一正

寺本巖愛称正ちゃんは、昨年から原因不明の高熱を繰り返し、貧血もあり、結局前立腺癌の骨転移によるものであることがわかり、阪大病院で入院治療していた。しかしその甲斐もなく、2019年6月23日に亡くなった。高村デルファの訃報から3週間も足らずに、親しい仲間を立て続けに亡くした。私は寺本と1950年に山岳部に入った同期で、多くの思い出を共有している。同期には井上潤がいるが、この3人は同じ工学部であり、このうちのだれが先に逝くかと、3人よればいつも話題であった。

1950年に山岳部に入った新人はそろいもそろって小さかった。林一彦先輩によれば、どいつもこいつも役に立ちそうな者はひとりもない、とご機嫌ななめであったという。しかしこの役立たずと思われていた者が、後に山岳部で活躍する。寺本は正ちゃん帽をかぶっていたからという単純な理由で正ちゃんというあだ名がついた。

彼は頭がよく、人を困らせるような問題を出し議論するのが好きであった。たとえば蝶々が入っているピンを秤にのせたとき、蝶々がピン

の中を飛んでいるとき、内壁に止まっているときでは秤の指す目盛りは変化あるか、ピンにふたをしているときはどうか、などという難問を皆に投げかけ、皆が困っているのを楽しんでいた。

彼は工業化学科の修士課程を卒業して松下電器産業で主に半導体関係の研究をした。半導体レーザーの研究で科学技術長官賞を、またCCD（撮像素子）開発ではアメリカ・テレビ芸術科学アカデミーのエミー賞を受けている。特筆すべきはテレビのリモコンの発明である。当時は超音波でリモコンが行われていたが、超音波は車など種々な原因で発生し問題があった。彼はこれを赤外発光ダイオードにおきかえ、実用化した。世界的にみても初めてで、特許申請をしたが、特許がうまくとれなかった。本人もこれが大発明という感覚がなかったという。うまくいけば、ビル・ゲイツなみの大富豪になっていたと思うと、本当に惜しいことをした。

また彼の知られざる業績としてCDディスクの直径を12cmとしたことがある。彼は最短波



キリマンジャロの頂上にて、右から二人目が寺本

長(780mm)の半導体レーザーを発明し、それを使うとベートーベンの第九交響曲をCD片面にいれることができるのである。そういう根拠で彼がCDディスクの直径をきめたという。

松下電器を退職後、8年間ほど岡山県立大学の教授として教職についた。著書も多い。特に「半導体デバイス概論」(培風館1995年)は教科書として評価が高いときく。

なお彼が2002年同大学を定年退職したときに、それまでに書き溜めた随筆や回想などを「いはほの徒言」と題した70頁ほどの小冊子にまとめている。

彼は仕事もよくしたが、天性のロマンチストであり、在職中も退職後も世界の秘境に足を伸ばしている。1969年2月には、中島暢太郎隊長率いる京都大学探検部アンデス学術調査隊チリ・パタゴニア氷河古地磁気調査隊の副隊長をつとめ、カバージョ・ブランコ(2012m)に初登頂している。さらに1993年8月には権間板

ヘルニアでコルセットをつけた身で、61歳でキリマンジャロ(5895m)に登頂している。また1995年5月にはパプアニューギニアのウィルヘルム山(4508m)にも登頂。その他主なものでもペルーアンデス、ノルウエー(オーロラ見物)、トルコ、カンボジア、チベットなど、数えられないくらいの足跡を残している。

国内の山もよく登っている。現役時代は冬の前穂高北尾根、知床など多くの厳しい山を登った。また後年は岡山にいた関係で、「岡山の山を登る会」-通称オキャン-を十数年にわたって世話してくれた。

旅はどこに行くかでなく、誰と行くかが大事ななんやと言っていたが、いつもニコニコして冗談をとばし、同行者をたのしませた。びっくりするような世界的な業績をあげた人とは、全く感じさせないのは彼の偉いところであった。

もっと長生きして我々をたのしませてほしかった。ご冥福を祈る。

追悼 寺本巖さん-京大探検部チリ・パタゴニア学術調査1968～69を回顧して

安成哲三

寺本さんが探検部チリ・パタゴニア調査隊に参加された経緯

1968年～69年に京大探検部はチリ・パタゴニア学術調査隊(正式名称は、京大探検部アンデス学術調査計画チリ・パタゴニア氷河・古地磁気調査班)を出した。発端は、元々山岳部1回生だった3人(安成哲三、井上民二、伊藤(由良)隆)が、チリ側パタゴニア探検を思い立ったことで、2回生から探検部に移籍して計画を進め、3回生の秋に結実した。氷河調査は、大学院進学が決まっていた井上治郎さん(山岳部)に声をかけて、やってもらうことになった。この調査隊の発想から計画、準備、そして現地での調査および帰国までのナラティブの報告は、岩波書店の雑誌『科学』に15回の連載で掲載しており、そちらを参照していただきたい(安成、2004～2005)。調査隊長には、当初、京大防災研究所の樋口明生助教授ご自身が隊長として行かれるつもりであったが、AACK側で急に浮上してきたネパールヒマラヤのヤルンカ

ン峰登山隊の実質的な責任者となったため不可能となった。そこで、樋口助教授は、上司の中島暢太郎教授(後に京大山岳部長)に話したところ、教授の公務の関係で1か月程度の出張が限度だが、ぜひ引き受けたいということになった。そこで現地調査の約3か月間、学生と共に過ごせる、副隊長兼実質的なリーダーとして、樋口さんは、京大山岳部同期の寺本さん(当時、松下電子工業(株)研究所勤務)を強く推薦された。寺本さんは、私たち学生にとってまったく未知の人物であったが、温かなお人柄に加え、登山や研究者としての経験など申し分ないという樋口さんの「お墨付き」もあり、参加していただくことになった。国内でも、野外調査の準備と隊の親睦を兼ねた北アルプス穂高周辺での山行や、琵琶湖でのモーターボート実習など、隊全体で一緒に行動するうちに、お互いの気心も通じるようになっていた。

副隊長（現地隊長）としての寺本さん

・巧みな交渉

副隊長としての寺本さんは、チリに到着してから、研究者らしい論理性と、押しの強さ、そして機転の良さで、大活躍であった。私たちが予定しているパタゴニアの南氷床地域をチリ側からアプローチするには、現地まで私たち6人に加え、日本から運んできた調査用の大量の物資の輸送が必要だった。寺本さんはまず、チリ最南端のプンタアレナスまで運航しているチリ海軍の船に乗せてもらえないか、首都サンチャゴの日本大使館に相談したが、「それはちょっと無理でしょう」と否定的だった。ともかく海軍省まで、大使館員1人に同行をお願いして、海軍担当官に説明したところ、「あの辺はわれわれチリ人でも行ってないところだ。日本からわざわざ来られて研究調査をされるとのことだし、協力しましょう」と、予想外の好意的な返事だった。ただ、確約は取れず、後日、中島隊長が着いてから再度、お願いすることになった。寺本さんは、別れ際、その担当官に自分のネクタイに付けていた真珠のネクタイピンをはずして、日本からのおみやげです、と行ってさしあげた。と、どうだろう。この担当官、「ちょっと待って」と、しばし席を外し、戻って来るといきなり、「じゃあ、（現地までの軍艦に）乗せましょう」とあっさり決まった。その後、中島隊長と共に空軍気象局長に会い、現地のウェリントン島のプエルト・エデンにある空軍の気象観測所の施設をベースキャンプ（BC）として使用する協力も得られた。

現地パタゴニアでも、私たちは予期せぬさまざまな問題に遭遇し、現地の方々に協力や依頼をお願いすることになったが、このような時も、小柄な寺本リーダーの、常にジェントルで相手の立場も考えた現地の方々との交渉は、好感を持って受け入れられ、解決することが多かった。

・技術屋としての寺本さん

チリ・パタゴニアは地図（図1、図2）で見ればわかるように、氷河地帯に取りつくためには、深いフィヨルドの海を走る足としてのモーターボートが必須であった。そのため、私たちは日本から、全長約5mの「きょうと号」と名づけたグラスファイバー製ボートに船外エンジンを付けたものを持参した（図3）。しかし、フィ

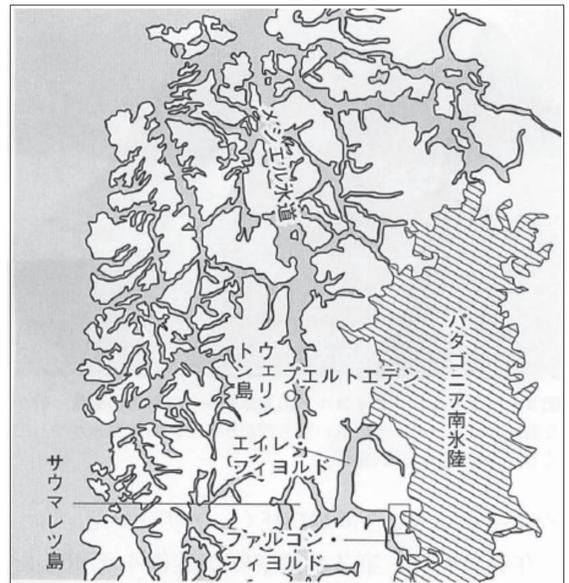


図1 チリ・プエルト・エデン付近

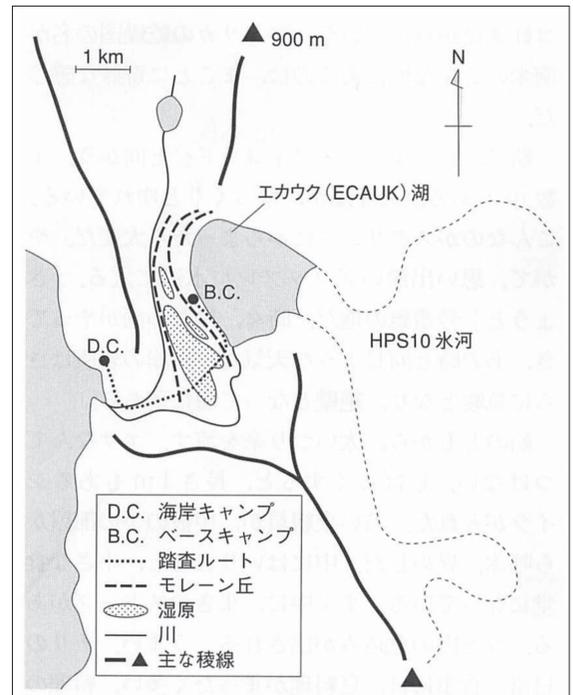


図2 HPS10 氷河付近。図1の四角い枠の部分の拡大図

ヨルドの海から氷河地域までの最初の偵察航海に4人（両井上、安成およびガイド役の先住民の漁師）が出たとたん、エンジンが何度もストップし、BCのプエルト・エデンから約50 km離れた小さな無人島サウマレツ島の小さな入江に漂着してしまった（図1参照）。この時も、寺

本さんが気象観測所と交渉して地元の漁船を出してもらい、フィヨルドの中の入江入江をくまなく探しながら、4日後に私たちを見つけてくれた。漂着した岸边に向かってくる漁船の姿が見えたので無線機のスイッチを入れると、「君たちはいったい何をしているのですか？」という寺本さんの声。怒るでもない、いやに落ち着いた声を私は今もよく覚えている。

さて、問題のモーターボートとエンジンをBCまで持ち帰り、エンジントラブルの原因究明を行うことになったが、とにかくエンジンを完全分解してみるしかなかった。技術屋であり、自動車が好きで日本でも車のメカいじりを得意としていたという寺本さんの指導の下で、ボート系の井上民二が丸一日かけて慎重に分解した。その結果、エンジンの核心部であるシリンダーとその外の冷却管の間の鉄の壁が欠損した、欠陥エンジンであることが判明した。このエンジンは船外機では世界でトップメーカーのJ社のものであっただけに、私たちの失望と怒りは大きかった。最も金と時間をかけて、はるばる日本から輸送してきた「きょうと号」は、あえなく「廃車」となってしまった。

・名調整役としての寺本さん

私たちは、思いもかけないトラブルで、当初の計画の変更も余儀なくされる事態となったが、中島隊長も交えた隊員会議が、長時間かけて行われた。大きな目的のひとつである氷河調査自体、氷河地域へのアクセスを、漁船チャーターなどの他力本願で行わざるをえなくなり、隊員の中のさまざまな意見の交錯と衝突が顕わになった。登山隊の場合は、とにかく登頂に向けてどうするかということで、目的ははっきりしており、隊員の意見もいろいろとあっても、最終的にはそれに向かった隊長（リーダー）の方針に従って、判断が下るはずである。ところが、私たちのような学生による「調査隊」では、そうはいかない。極端に言えば、隊員1人1人、やりたいことがそれぞれ異なっている。特に今回の調査を、井上治郎は修論、私は卒論のテーマとしても考えていた。もちろん、現地では協力し合って行動することが原則にはなっているし、隊員全員の安心安全は最低限の前提であった。ただ、そうはいっても、例えば、科研費（文科省の科学研究費）などによる、それぞれのテーマを専門にしたプロの研究者による調査ではな

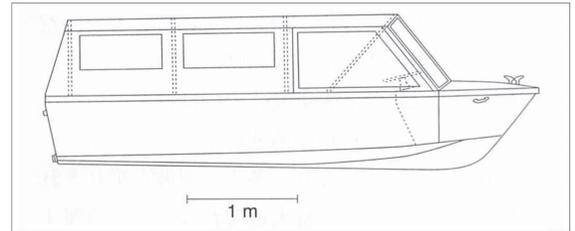


図3 チリ・パタゴニアへ持参したグラスファイバー製のボート(UT-450 KIOTO号)。規格:全長4.5m、全幅1.6m、深さ0.68m、重量200kg。

い。実は、この中途半端さ、あいまいさが、学生探検部の大きな課題であった。特に、京大探検部は、山岳部との違いを明確化して独立した経緯も踏まえて、スポーツ登山ではない学術調査をめざすという、設立時からの暗黙の了解があった。中島隊長も、そのことは十分了解してほしいということで、寺本さんに副隊長をお願いしていた。

私たちは、このために、出発前から現地での調査中も含め、常に、「全員合議制」により、各自の目的の質的平等をできるだけ保とうとしていた。私たちは現地でもほんとうによく議論をしていた。寺本さんご自身は工学分野の研究者だが、隊全体の実質のリーダーとして大変苦勞されていたが、私たち学生の「ホンネとタテマエ」も、よく分かっていた。特に、自前で準備したモーターボートが使えなくなり、全体の予定を大幅に変更せざるをえなくなった状況で、それぞれの隊員の主張の折り合いがつかなくなった。寺本さんは、お互いの言いたいことをすべて言わせたあとで、「最終的には、みな、パタゴニアに行きたいということで一致して来たんやから、(自分の)調査目的は、二の次で考えてもええやないか。」という「寺本評定」で最終的にうまくまとめてくれた。おかげで、いくつかのアクシデントやトラブルもあったが、全員大きな怪我や病気もなく、ケンカ別れもなく、それぞれ満足して帰国することができた。

・山屋としての寺本さん

チリ・パタゴニアはほんとうに天気の悪いところで、約3か月の滞在中で、晴れた日は数日もなかった。写真1は、そのわずかな好天日をとらえて、私たちの調査したHPS10氷河とその末端にある氷河湖を撮った写真である。氷河



写真1 私たちの調査したHPS10氷河とその末端にある氷河湖（ECAUK湖と命名）を撮った写真である。氷河源頭の山は、リソパトロン（Riso Patron）山塊の一部。主峰は3019mと推定されている。



写真2 ECAUK湖岸キャンプからHPS10氷河に向かう隊員。



写真3 孤立峰「白馬岳（カバージョ・ブランコ）」をめざす井上治郎（右）、井上民二（左）の両隊員。（寺本副隊長撮影）

源頭の山は、リソパトロン峰で、同時期にこの地域に入った六甲学院山岳会の隊はこの峰の登頂をめざしていた。この氷河に取りつくには、写真2のように、湖畔キャンプからゴムボート

での移動が必要だった。

さて、HPS10氷河の調査を終え、撤収を開始した2月初め、びっくりするほどの快晴の日を含め、好天が数日だけ続いた。この期間をとらえて、氷河湖畔のキャンプから南部氷床に至る尾根ぞいを登り、周辺全体の地形や氷河を俯瞰するトレッキングを行った。この時、氷床の端にも近いところに、白馬岳のようなかたちの2千メートル程度のかっこうのいい独立峰を見つけた。（平井一正氏追悼文にある「カバージョ・ブランコ」である。）低いとはいえ、もちろん未踏峰である。私たちのパタゴニア計画を、探検部顧問の大御所である今西錦司先生にも一度、相談にいった時、今西さんは、いろいろと話された後にひと言。「山にも登ってこい。」寺本さんは、そのことを聞いていたわけではないが、撤収の準備をしながらも、「僕は山に登ってこんど、AACKを破門になるわ。」と、半ば冗談ながら初めてご自身の希望を述べられた。この好天を逃す手はないということと、寺本副隊長のねぎらいも含め、この時は全員一致で、急きょ、両井上と寺本氏の3人がこの「白馬岳」に1日アタックをかけることを決定した。写真3はアタック中の両井上、写真4は、無事3人で登頂を果たした時の写真である。山頂高度は2千メートルには及ばなかったものの、3人は大満足で戻ってきた。

研究者・技術者としての寺本さんーリモコン・スイッチの生みの親

寺本さんは、氷河上や氷河湖周辺での調査中も、物理と化学に長けたすぐれた研究者であることを感じる場面が多々あり、私は地球物理専攻の学生として、大変勉強になった。ただ、ふだんは企業の研究所で半導体とかダイオードがらみの研究・開発をされているようだ、程度しか知らなかったし、寺本さんご自身も、自分の研究の話がされることはなかった。帰国後も、年に1回程度、アンデス・パタゴニア記念の飲み会などで顔を合わせて、思い出の話に花を咲かせるだけで、仕事の話がされることはなかった。今回、AACKニュースレターで寺本さんのことを書くにあたり、彼の仕事について少し調べていたら、実は、現在の電気製品（テレビ、ラジオ、エアコン、電灯等々）では不可欠の存在になっているリモコン・スイッチの生みの親



写真4 「白馬岳（カバージョ・ブランコ）」登頂を果たした寺本副隊長、井上治郎隊員、井上民二隊員。



写真5 満月の光に照らし出されたHPS10氷河とECAUK湖。

であることがわかった。

パタゴニアから帰国してすぐの1970年代はじめに、松下電子工業の研究所で、彼は、発光ダイオードの研究開発をしていた。めざすは、ディスプレイに使える可視光のLEDの開発であった。発光ダイオードLEDといえば、ノーベル賞をもらった赤崎勇教授のグループの青色のLEDの開発が有名だが、当時は、可視光を発光できるLED開発のための混晶結晶の製造の特許をモンサント社が抑えており、とても高価で商品にはできない状況だった。ただ、比較的安い混晶結晶で、赤外線を発光するLEDはできることがわかり、この応用として、赤外線リモコンを試作することができた。当時は、他社がすでに超音波を利用したリモコンを開発し、商品化していたが、音波利用のためさまざまな雑音を拾って、誤作動する不具合があり、不評であった。しかし、寺本さんらの開発した赤外線発光LEDをセンサーに用いたリモコン

は、非常に弱い電気エネルギーで確実にスイッチのオン・オフなどが作動する画期的商品となった。ただ、寺本さんも会社も、当時はこの商品がそんなに値打ちのあるものと思っていなかったこともあって特許取得の手続きがうまくいかず、けっきょく、特許なしで商品化して世に出した。しかし、そのことのために、この赤外線リモコンは世界中で爆発的に普及し、今やリモコンの世界の標準商品になってしまったとのこと。この経緯を、寺本さんは亡くなる少し前に行った京都化学者クラブ例会の講演ではじめて明らかにしている。（詳しくは寺本（2017）を参照）

おわりに

チリ・パタゴニア探検から今年でちょうど50年になった。当時の隊員6人のうち、中島暢太郎先生、寺本巖さん、井上治郎さん、井上民二さんの4人がすでに冥界入りとなってしまった。あらためて、彼等への感謝と追悼の思いで一杯である。1969年2月1日夜は、嵐の土地チリ・パタゴニアにはほんとうに稀有の、満月の光に照らし出されたHPS10氷河と湖の景色はこの世のものとは思われないほどの、神秘的な夜（写真5）だった。冥界の4人も、あの夜を思い出しながら、あちらでワイワイと一杯やっているような気がしてならない。

参考文献：

- 安成哲三（2004～2005）：チリ・パタゴニア1968-69—ある学生探検の記録。科学。全15回。岩波書店。（以下からダウンロード可能です。）
http://www.chikyu.ac.jp/yasunari/yasunari_bak/list/essaysothers.html
 寺本 巖（2017）：特許を取れなかった技術、取らなかった技術。海洋化学研究、30巻2号、109-114。

第49回雲南懇話会（2019年8月19日開催）講演概要

山岸久雄、前田栄三



第49回雲南懇話会は2019年8月19日(月)、JICA 国際会議場（東京・市ヶ谷）で開催されましたので、その概要を紹介いたします（写真は全て、岩脇康一氏撮影）。

1. トピック「南極隕石が教えてくれる太陽系の歴史」

国立極地研究所 地圏研究グループ准教授
山口 亮

山口准教授は南極で隕石が見つかる理由、隕石の特徴、隕石から知る太陽系の歴史、小惑星探査に関わる最近のトピック等について語られた。石質隕石、鉄隕石の現物も持参され、講演後、間近に観察することができた。



今から50年前（1969年）、日本の南極観測隊が南極大陸上の「やまと山脈」付近で偶然、隕石を発見したことがきっかけとなり、以後、たくさんの隕石が南極で見つかっている。これまで世界で見つかった隕石は62,000個近くであるが、そのうち60%以上が南極で見つかっている。何故、南極で隕石が見つかりやすいのか？それは、南極氷床には隕石を集積する作用が働くからであり、その機構を図解して説明された。

1969年は、惑星科学にとって記念すべき年であり、宇宙物質研究の夜明けの年であると言う。1969年2月には大量（2トン以上）の隕石がメキシコに落下し、7月にはアポロ11号が月面に着陸し、試料を採取。そして12月に

は第10次南極地域観測隊が「やまと山脈」付近の氷床上で偶然9個の南極隕石を発見したからである。これらの隕石の大部分は、火星と木星の間にある小惑星帯からやって来たものであり、一部、彗星起源のものもあると考えられている。今から46億年前、太陽の周りを回る原始太陽系星雲から微惑星が生まれ、それらが衝突合体することで大きな惑星に成長していった。その時、惑星になり損ねた生き残りが小惑星である。従って、隕石を研究することは、その起源である小惑星、つまり地球の原材料を研究することになり、太陽系ができあがる歴史を知る手だてとなっている。

最近、太陽系形成の新たな仮説が提唱されているとのこと。太陽系誕生の数百万年後、巨大惑星（木星など）が急成長し、太陽系内を移動した。これに伴い、微惑星が太陽系全域にまき散らされ、それらが衝突合体して現在の惑星が作られていったという説である。このような研究は数多くの太陽系物質（隕石など）を研究することで、初めて可能になったものであり、今後とも数多くの南極隕石を採集し、研究することで、太陽系形成過程の詳細に迫りたい、と話しを結ばれた。

本講演会には第10次観測隊員として南極隕石を初めて発見した上田豊氏が来場されており、上田氏から発見当時の様子を語っていただくことができた。

2. 「インド北東部 インパール・コヒマの今一人々の暮らしと祭祀ー」

地球の旅人 東苑泰子

インド北東部にあるインパールとコヒマは、ミャンマーとの国境地帯にあり、様々な少数民族が住んでいる。第二次世界大戦中、日本軍と連合軍が死闘を繰り広げたそれらの町、及び周辺地域では、現地の人々に当時の日本兵の存在が記憶され続けている。2019年6月頃、日本兵の血で赤く染まったと



いう「レッドヒル」の近くに戦争博物館が開設されたという。

現在、インパールとコヒマは、それぞれインドのマニプリ州とナガランド州の州都となっている。東苑氏は、山に囲まれた盆地のインパールで、メイテイ族の長老が管理する自宅兼ゲストハウスに滞在し、親戚の間で行われる行事(毎年9月、10月に行われる先祖を祀る祭)や近所で行われたメイテイ族の結婚式、町を挙げて開催される季節の祭り(ヒヤンタン寺院の秋祭り)に参加することが出来た。一方、山沿いのコヒマでは、乗合いバスで偶然に隣り合わせたナガ族の若い母親のアパートにお世話になり、ナガランドの部族が一堂に会するホーンビル・フェスティバルを体験し、堪能することができた。

本講演では、これらの祭りの様子とともに、現地の人々との交流を通じて体験した各部族の暮らし、伝統文化、彼らが抱える生活実感、町の風景などを紹介された。映像・画像に見る穏やかで和やかな暮らしぶり、敬虔な祈り(儀礼)、昔とさして変わらぬであろう長閑な田園風景……。(会場での質問に答えて、コヒマに住むチベット族の長老に照会したところ)ナガランドに住んでいるチベット人は、100人くらいいる。チベット出身者は、1980年代からコヒマやディマプールなどの町に住んでいる。大きなコミュニティーではないので、チベット寺院は無く、お祈りや行事のために部屋を借りているとのことであった。

(以下は前田の感慨です) 脳裡を過ぎるのは、その対極ともいえるべき日英両軍の戦闘、雨季に入り敗残の日本軍兵士が辿った山路・大河の渡河・タイ国への道、タイ国内の撤退路(総称して所謂、白骨街道)である。

2019年8月17日、NKK-BSで「戦慄の記録 インパール」と題する2時間に及ぶ番組が再放送された。

戦闘直後の日本兵の死体、きちっとした軍装にハエが集る様子が映写された。作戦中止、即ち撤退を開始してからの死者の数が夥しく急増していく様が青色で点描された。痛ましいこと限りなし。

3. 「多田等観と宮沢賢治 一チベットに捧げた人生と西域への夢」

花巻市博物館長 高橋 信雄

高橋氏はチベット仏教学者・多田等観と宮沢賢治、その二人をつなぐ島地大等について、貴重なスライドを交え、以下のように語られた。



多田等観は1911年、秋田中学を卒業後、西本願寺に入山。大谷光瑞の意向で1年間、チベットからの留学生と随行者3人の世話をしながら、チベット語を習得し、翌年、帰還する留学生に付き添ってインドに渡った。1913年、西本願寺からのチベット入蔵命令書を受け取り、単独でヒマラヤ(ブータン)を越え、チベットに入った。チベットでの等観は、ダライ・ラマ13世の庇護の下、約十年間修業し、外国人としては初めての最高学位ゲシェー(大僧正)に任じられた。帰国に際し、大乘経を始め、数々の仏典、仏画、仏像等を持ち帰った。帰国後、等観は東京帝大の嘱託や東北帝大、東京大学の講師を歴任。「西藏大蔵経総目録」等の作成により1955年、日本学士院賞を受賞した。等観の持ち帰った資料や、帰国後ダライ・ラマ13世の遺言で送られてきたチベットの秘宝といわれる「釈迦牟尼世尊絵伝」は戦火を免れるため、等観の弟が住職を務める花巻の光徳寺に送られ、現在では花巻市博物館が保管。随時公開されている。

多田等観をチベット滞在中から支援し、帰国後も世話をしたのが盛岡市願教寺の住職であり、東京帝大教授でもあった島地大等である。大等は第1次大谷探検隊の隊員であり、宗派にとらわれない各宗派に通じた仏教学者であった。自身は浄土真宗の僧侶でありながら、天台哲学の権威でもあった。

童話作家・宮沢賢治は、盛岡中学を卒業後、大等が著した「漢和対照妙法蓮華経」に出会い、感銘を受け、法華経信者となる。賢治の作品の中には、西域異聞三部作童話(雁の童子、インドラの網、マグノリアの木)に見られるように、西域の地名やチベットを窺わせる情景の表現がしばしばみられる。賢治は島地大等を介して、多田等観が見聞した世界に大きな影響を受けたのであろう。

4. 「生と死のミニャ・コンガ（7556メートル、中国四川省）～39年間の物語～」

写真家・ビデオジャーナリスト、
北海道大学山とスキーの会、
雪崩事故防止研究会代表、
日本雪氷学会雪氷災害調査チーム前代表
阿部 幹雄

ミニャ・コンガ（7556メートル、四川省）をめぐる長い物語は、阿部氏の少年時代の石鎚山登山、山に開眼した北大山とスキーの会での活動の話から始まった。



1980年、ミニャ・コンガ偵察のため、阿部氏は同峰の東側山麓の村を訪問した。阿部氏らは同村を50年ぶりに訪れる外国人だった。その日、村に初めての自動車が走り、車に乗った阿部氏らは大群衆に囲まれた。

1981年、北海道山岳連盟はミニャ・コンガ登山隊を派遣。登山隊の行動をふりかえると、4000mの高度で各自30kgの荷を担いで歩行するなど、高度順応には向かない方針が採られることがあった。これを含め、山行中に嫌な予感を3回感じたという。その予感は現実のものとなった。頂上直下、1本のロープにつながった8名の隊員の内、1人が滑落。他の隊員も次々に引きずられ、滑落する仲間を確保しようとした隊員は、空中に弾き飛ばされてしまった。阿部氏はたまたま、このロープに連なっていなかったため、滑落はまぬがれ、1人生き残ったが、その後の行動中、クレバスにかぶった新雪を踏みぬき、体が落ち込み、脱出できなくなる。登頂隊の安否を心配し、下のキャンプから上がってきた1人の隊員の献身的な努力でクレバスから脱することができた経緯を冷静に語られた。

事故の9年後、阿部氏は登山を再開したが、高さを求めず、垂直から水平方向の探検へと志向を変えた。1995年、遭難した登山隊の遺品が出現したとの報を受け現地に赴き、遺体捜索を行う。その後、2009年まで4度にわたり遺体捜索・収容を行い、遺体は現地で茶毘に付し、遺骨、遺品を遺族のもとへ届けたという。慰霊のため遺族を現地に案内すること、6度に及んだ。大遭難の中で1人生かされたことの意味を自問する阿部氏にとって、この困難な仕事に

取り組むことは、その答えを得るプロセスでもあったろう。その献身的な努力には頭が下がる。阿部氏はこの間、山岳狩猟民族イ族が暮らす村の変容を30年にわたり見てきた。彼らは火縄銃を携え、狩猟と薬草採取のために山に登る生活をしてきたが、現在は近代化が進み、電化製品と携帯電話が普及している。現地には観光ホテルが林立し、ロープウェイが建設された。

阿部氏は2007年から3年連続して南極観測隊に参加した。昭和基地から700km離れたセール・ロンダーネ山地での長期キャンプ生活を伴う広域地学調査に登山の専門家として参加し、隊員の安全と生活を守る任務についた。困難な自然環境の中、誰ひとり事故に会うことなく調査成果を上げ、任務を全うできたのは、ミニャ・コンガの遭難と真摯に向き合った阿部氏ならではのものであったろう。阿部氏は親交のあった上田豊氏（Yalung Kang, 8505mの初登頂者、本会会員）から贈られた「生きて帰れ」のひと言を胸に、ミニャ・コンガに向かったが、南極での隊務の最後に、上田氏が25年前に拓いたルートを逆にたどる旅をすることができ、感無量であったという。ミニャ・コンガで始まった長い物語は、2010年、南極の話しで結ばれた。

第50回 雲南懇話会のお知らせ

第50回雲南懇話会を以下のとおり開催致します。

1. 日 時：2019年12月22日（日）13時00分～17時30分。その後、茶話会。
2. 場 所：国際協力機構（JICA）研究所、国際会議場（東京市ヶ谷）

<https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/about/access.html>

3. 懇話会の内容（講師、演題、講演順序など変更ある場合は、ご了承をお願いします。）

(1) 「雲南中華世界の膨張、絶え間なく移住する人々 一石屏県とプーアル茶を巡る歴史の中で一」

早稲田大学非常勤講師
西川和孝

(2) 「七つの大陸の最高峰を訪ねて 一山岳部復活を目指したドリーム計画一」

神奈川大学体育会山岳部総監督
落合正治

(3) 「スマトラ・カリマンタンの低湿地と地球環境問題 —泥炭湿地をはいずりまわる—」
愛媛大学大学院農学研究科准教授
嶋村鉄也

(4) 「冬山登山の実像 —黒部横断、冬剣、冬薬師、そして海外の山々—」
明治大学山岳部 (前) 監督、炉辺会、日本・ネパール カンチェンジュンガ登山隊 (JAC、1984 年) 隊員

山本宗彦

図書紹介

「日本映画大学で実践しているドキュメンタリー映像制作の作法」

安岡卓治著

株式会社玄光社、2019 年 10 月 18 日発行 237 ページ

ISBN978-4-7683-1246-9 定価 2000 円+税

横山宏太郎

このたび、出版と同時に表記の本をいただいた。私はもとよりこのような分野とは縁遠く、また会員の皆さんでも直接かかわるような方は少ないと思われるが、著者、安岡卓治 (やすおか・たかはる) さんとのご縁で、紹介することをお許しいただきたい。

安岡さんは、1985 年の京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊 (マサ・コン隊) に同行取材された、テレビディレクターである。私たちマサ・コン隊の、映像記録を残し、なおかつ支援もいただければありがたい、という虫のよい要望に応じて東京放送 (TBS) が派遣してくれた取材班が、ディレクターの安岡さんと、カメラマンの中里雅行さんであった。二人とも本格的な登山の経験はないので、登山の同行取材・撮影は途中の ABC までとし、それより高所は、家庭用の小型ビデオカメラを隊員が預かって撮影した。一方で取材班は、登山だけではなく、栗田靖之副隊長と同行してブータン各地を取材し、貴重な映像を記録された。それらをまとめた番組は、「秘境ブータン」と題して、1985 年 12 月に放送された。

あれから 30 年以上、ずっとご無沙汰していたが、つい最近、思いがけず、連絡をいただいた。用件は、AACK ウェブサイトに掲載している、マサ・コン隊の写真の使用 (転載) についてであった。

安岡さんは、当時は映像を制作する会社に勤務しておられたが、いまは、日本映画大学の教

日本映画大学で実践している

ドキュメンタリー

映像制作 の 作法

安岡卓治

には作業設計が大切
◎実践編—インタビューの撮影
対話を成立させる／インタビューの撮影
と編集／インタビュー作品の編集と鑑賞の編集
◎実践編—編集
集Ⅱカット表を作って映画の構造を分析してみよう／映画編集者
浦岡敏一さんのごとく／素材シートとカット表と組立シート
インス／見せ場と「聞かせどころ」をどう生かすのか？／ロケ
イン／からストーリーテリングとしてプレゼン／「ナレーション」
で述
メンタリーの様々なかたち／多様なドキュメ
ンタリーの様々なかたち／多様なドキュメ
ンタリー／想田和弘さんの「観察映画」／アジ
ア共同プロジェクト／広がる国際的な人材育
成プロジェクト／佐藤真／今村昌平と土本典昭
ロケ／高岡／ヨコハママリー／かつて白化症の老婦
いた／「録音」と「私」の現場で体験した感
覚
映画・映像業界でプロになるということ

授として学生を指導しながら、ドキュメンタリー映画のプロデューサーとしてもご活躍とのことである。映像関係の雑誌『ビデオサロン』(玄光社) に記事を連載している、そのなかで、マサ・コン隊参加時のエピソードも取り上げるので写真を使用したい、とのご希望に、もちろん OK し、ほどなくして記事掲載の雑誌が送られてきた。それによれば登山隊への同行は「ちょっと待った」「もう一度」が言えない現場として、紹介されている。また「作業設計」「機材準備とバックアップ」の重要性も述べられている。40 日間で体重を 7kg も減らされたそうで、安岡さんにとってはご苦勞の多い現場であったのに、よくお付き合いくださったものである。

さて、その連載記事をもとに構成されたのが本書である。第一章「大学」ではこの大学の様子が紹介され (キャンパス紹介とは趣が違う)、ついで実践編として第 2 章以降は企画、撮影、

インタビュー、編集と進む。いずれも、マニュアル的な記述ではなく、多くの体験、実例をあげて読み手の理解をうながす。これ自体が、ひとつのドキュメンタリーのようなでもある。そこで紹介される多くの人々との交流には、門外漢の私でも知っているような有名な人々も登場し、読み物としても面白い。

安岡さんの言葉として、「この大学の存在意義は何なのでしょう。それは、1年から一貫して『人間と出会い、見つめる』ことをカリキュラムの中に織り込んでいることだと、私は考えています。」とあるように、人間を見つめ、それを描くのが安岡流の「ドキュメンタリーの作法」なのではないだろうか。そういえば、見返

したあのビデオでは、亜熱帯からヒマラヤまでの多様な自然を舞台として、そこに生きるブータンの人たちや、それぞれの思いをもって頂上に向かう登山隊員たち、それら「登場人物」を描くのに多くの時間が使われていた。

最近では、ヒマラヤをはじめ、世界各地の風景や文化、人々の生活などが美しい映像で紹介されている。その撮影を担っている人たちのなかには、安岡さんの指導を受けた人がたくさんいることもわかった。もちろん、単に美しいだけでなく、すばらしいドキュメンタリー作品を私たちが見ることができるのは、安岡さんをはじめとする、この分野に携わる方々のおかげである。ますますのご活躍を期待したい。

会員動向

訃報

平田和男 2019年10月6日逝去

会員異動



編集後記

各地で台風や大雨などの甚大な被害が伝えられていますが、皆様ご無事でしょうか。私の近くでも（直接の影響はありませんが）、千曲川の決壊で大きな浸水被害が出ました。新幹線水没の映像に驚かれた方も多いことでしょう。生活でも登山でも、私たちを取り巻く環境はすでに変わりつつある、と考える行動しなければ、と感じています。

本年最終の91号にご寄稿の皆様、ありがとうございました。新しい年がよい年になりますように。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2020年1月16日

原稿送り先：横山宏太郎



発行日 2019年11月30日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
(株)土倉事務所